



2015年 12月開館予定表

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

2016年 1月開館予定表

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

	9:00-20:00		9:00-17:00
	13:00-20:00		13:00-17:00
	休館日		9:00-19:00

発行所

〒648-0280

和歌山県伊都郡高野町

高野山 385

高野山大学図書館

閲覧室

TEL : 0736-56-3835

FAX : 0736-56-5590

E-mail

service-lib@koyasan-u.ac.jp

twitter : @koyasanlib

第6回 高野山大学図書館戸田文化講座

文学と仏教の接点 - 私の半生を中心に -

11月26日(木)16:40より大学
2階 205号教室におきまして図書
館戸田文化講座を開催しました。

講師は下西忠図書館長でした。

文学の道に進んだきっかけ、説話の
魅力、そして説話と仏教との関わりをご講演してくだ
さいました。

この講座は本年度最後の文化講座でした。



参加して下さいました皆様、

どうもありがとうございました!

図書館のイベントやお知らせは図書館
HP やツイッターでもご覧になれます。
ぜひチェックしてみてください。

図書館の冬季休業期間は12月26日から
1月6日までです!

卒論完成にむけてのラストスパート、冬休み中
のお楽しみのため。理由は様々ですが、図書館の資料
を借りっぱなしにしていますか?

この期間中図書館はご利用できません。資料の返却
は郵送でも受け付けています。返却があればお早め
にお願いします。

－ 玄賓僧都のはなし －

高野山大学教授 図書館長 下西 忠

長明の仏教説話集に『発心集』があるが、巻頭に彼の逸話がふたつ紹介されている。高僧の再出家譚ともいえるもので、名利に固執されなかった彼の生き方が描かれている。南都興福寺の高僧が突如としてそこを離れて諸国を放浪する。あるときには船頭、あるときには「僧都（そぼづ）」（この場合は案山子^{かかし}）となって田などを守っていた。高僧が一転してそのような身におとしめたのである。彼の意図は明確であろう。

さて、『発心集』には玄賓の逸話がもうひとつ紹介されている。巻四の第六話に「玄賓、念を垂相の室に係くる事 不浄観の事」である。前半の話の梗概はつぎのようなもの。

あらゆる階層の人が、玄賓は仏のような存在だと思って尊敬していた。高貴な大納言も久しく玄賓に帰依していた。その玄賓が病にかかった。大納言がみずから彼のもとに赴き、「お具合はどうですか」などねんごろに見舞った。「玄賓は近く寄ってください。申しあげたいことがあります」という。不思議に思った大納言に対して、玄賓は、たいした病ではないのです。先日あなたのお屋敷に参りました時、奥方のお顔がたいへん美しい、ちらって奥方のそのうつくしさをみて以来、正気を失って、心が乱れ、胸がふさがりような



思いになったのです。こんなことは、口に出すだけでも憚りがあるのですが、あなたを深くお頼み申しあげてもう長い年月になります。どうして（あなたと）心の隔たりを作ってよいものか、と思い悩んでいます、と申し上げた。驚いた大納言、しかし「そうであるならば、どうしてもっと早くおっしゃらなかったのですか。たやすい事です。速やかにお悩みを解消させてあげましょう。私の家においで下さい。おっしゃるとおりにご便宜をはかります」と言って大納言は帰った。大納言は妻にかくかくしかじかと語る。妻は同意する。玄賓を迎える準備をする妻。玄賓は法服を作法通りに着用して大納言邸にやってきた。……。玄賓は一時（約 2 時間ばかり）奥方を見守ったまま「弾指」をたびたびして帰ったというのです。……の部分はいくつか省略します。

さて、日本古典文学集成の頭注の「弾指」について、「つまはじき。仏教で敬意、警告、許可、歓喜などの合図や意志表示の動作」とある。小学館の『日本国語大辞典』もしかり。

この説話の主題は副題「不浄観の事」にある。「弾指」は、「不浄弾指」の意味で、不浄を見聞したときなど、それを払い除けるためにする行為の意でなければならない。いわば作法である。中村元氏の『広説佛教語大辞典』の説明にあるとおりである。玄賓は最初から大納言の妻と関係をもちたいなど微塵も思っていなかった。己が心にあらわれる不浄、それを取り除きたい一心だけが玄賓にあった。大納言もはじめから玄賓の意図を察していたはずである。威儀をただした玄賓の法服に玄賓の思いが読み取れる。聖僧玄賓のすばらしさを痛感するのみである。なお、玄賓は弘法大師と同時代に活躍した高僧であった。